公益財団法人国土地理協会　第16 回学術研究助成

近代京都における大学の歴史地理学的研究

―藩邸、公家屋敷、ならびに寺社地の転用を中心に―

研究代表者

河島　一仁　　立命館大学文学部

1. はじめに

日本における近世末から近代への移行期には、都市景観の著しい変化がみられた。これは、歴史地理学でも論じられるべき課題の一つである。当時の都市のなかでも、京都における変化は、他の都市とは全く異なるものであった。

京都には京都所司代が置かれていたが、この都市は本来的にはさほどの武士を擁していなかった。しかし、ペリーの来航以降における政治的な変化によって、京都では諸藩の藩邸（藩屋敷）が増加し、武士が京都に流入した。そして、様々な政治勢力による武力抗争が起こった。その代表例は、元治元（1864）年における、長州と薩摩・会津などとの禁門の変（蛤御門の変）である。これによって、庶民の居住地域が甚大な被害を受けたことも、都市景観の変化である。そしてついに、慶応4（1868）年には鳥羽伏見の戦いがおこり、倒幕が現実のものとなっていった。

幕府が倒れ、明治2（1869）年の版籍奉還、明治4（1871）年の廃藩置県などの諸改革が進められていく過程で、京都に分布していた諸藩の藩邸も、当然ながら廃却されていくという変化が起こった。そのほかに、東京奠都によって引き起こされた変化もあった。

天皇と皇族、ならびに多くの公家が、東京に転住し、京都御所の周囲にひろがっていた宮家と公家の屋敷群が、無住となり、荒廃するにいたった。今日では、北は今出川通、西は烏丸通、南は丸太町通、そして東は寺町通と梨木通で画される範囲は、「京都御苑」として人々の憩いの場となっている。この御苑は、明治天皇からの下賜金をもとに行われた大内保存事業によって出現した。近代における諸制度の変化は、このように京都の都市景観を大きく変貌させたのであった。

東京奠都によって、京都の地域経済が大打撃を受けたことも見落とすわけにはいかない。その苦境を克服すべく、博覧会の開催、琵琶湖疏水の開通、発電事業の展開、路面電車の敷設などのさまざまな活性策によって、近代以降の京都は、発展の方向に転じることとなった。

近代以降に京都の都市景観に新しく加えられたものが、後に大学となる教育機関である。それぞれの大学で沿革史が編まれる際に、京都の歴史のなかに自校のそれが位置づけられていることは言うまでもない。地理学でも、京都における大学の地理が、山脇正資氏[1]と古賀慎二氏[2]によって考察されている。しかし、歴史地理学的に京都の大学を考察した研究例は、筆者による成果のほかには見当たらないように思われる。

2005年に、筆者は、同志社・龍谷・大谷そして立命館の私立4大学と、第三高等学校と京都帝国大学が、どのような施設を転用して立地したのか、という事実を整理した。それらのうちで、特に第三高等学校と京都帝国大学が立地した吉田とその周辺に関して、歴史学者の喜田貞吉の随筆を資料として、筆者は考察を試みた[3]。

それについで、京都近郊における等持院村の範域での地理的変化を、マキノ省三に代表される映画産業と、中川小十郎による立命館日満高等工科学校の創設を軸にして論じた[4]。大学の沿革史では、考察は敷地のなかに限定されがちである。しかし、歴史地理学的に近世村落の範域を空間単位として、そのなかにおける映画産業と教育機関の立地が地域に及ぼした影響に関して、筆者は考察した。おそらくこのような試みは、それまでにはなかったと思われる。

さらに、京都御所の周辺地域を対象として、同志社と立命館の敷地獲得と拡大過程に関して考察し、龍谷・大谷・三高・京都帝大に関しても言及した[5]。東京奠都のもたらした土地利用と土地所有の変化が、後に大学となる教育機関に立地の機会を与えることになったことについて論じた次第である。

最近では、明治行政村である衣笠村の境域を選択し、同境域における薩摩藩邸の立地を踏まえつ

つ、映画撮影所の立地とその関係者の居住、ならびに画家の転入などを時系列で整理し、足利氏の菩提寺である等持院の土地所有の変化のなかに、立命館日満高等工科学校の立地を位置づけた[6)]。それとともに、等持院村に隣接する小松原村に存在した薩摩藩の弾薬庫に関しても、地図と関連資料をもとに考察を加えた。

2005年以降における、筆者による研究では、鴨東の吉田村に位置した三高・京都帝大、京都御所の周辺地域に位置した同志社と立命館、高倉通魚棚上ルで発足し、2年後に市街地の北郊に移転した大谷大学、本願寺派総本山の西本願寺の境内で創設された龍谷大学、そして市街地の西郊で、等持院の境内地に設立された立命館日満高等工科学校などが、考察の対象とされた。つまり、筆者の研究は、京都の市街地とその周辺を含む地理的範囲を考察の地域的枠組としてきたことになる。

上記の教育機関のなかで、発足がもっとも古いものは、明治8（1875）年の同志社英学校であり、最も新しいものは、昭和14（1939）年の立命館日満高等工科学校（後の立命館大学理工学部）である。したがって、筆者によるこれまでの研究は、1875年から1939年までの64年間を対象としてきた。

本報告では、これまでの成果をもとに、第一に対象を絞ることにする。同志社・龍谷・大谷および立命館の私立4大学のうちで、大谷大学だけはまとまった農地を転用して、キャンパスを創出した。これは、大谷派の富裕な門徒の寄付によって成し遂げられたことである。しかし、他の3大学は、すでに何らかの利用がされた地面を再開発して、立地したという共通した特徴を有している。三高と京都帝大の場合も、他の3大学とほぼ同様に地面を活用している。以上の理由で、本報告では、ひとまず大谷大学を除外する。

第二に、考察の対象時期を、藩邸が京都で増加した19世紀の後半、特に文久年間から、昭和14年ころまでとする。これが、本報告とこれまでの研究との第二の相違点である。なお、西本願寺が17世紀に創建されたことは、いうまでもない。

上記の二点を踏まえて、本報告の第2章では、同志社と三高・京大とかかわる薩摩藩邸と尾張藩邸に関して整理する。その際、三高の移転候補地になった地域も含めることにする。第3章では、藩邸跡の利用について事実を確認する。第4章では、龍谷大学を創設した西本願寺、ならびに立命館が立地した中御霊社、そして等持院の境内地における立命館日満高等工科学校を対象として、寺社の境内地と大学としての利用との対比を試みる。そして最後に、第5章では、大学創立者の「空間デザイン」と従前の土地利用との比較をおこない、特に立命館の創立者である中川小十郎の「空間デザイン」と尾張藩邸・三高・京都帝大との関連性について考察する。大学が京都の都市景観のなかに創出されていく過程において、大学創立者の「空間デザイン」が論じられていないわけではない。しかし、京都帝国大学の書記官として活躍した中川小十郎は、その後も京都帝国大学との関係を維持しつつ学校経営に邁進した。おそらく彼の脳裏にあった「空間デザイン」を可能な限り明らかにしたいと筆者は考えている。

史料として、鹿児島県歴史資料センター黎明館と名古屋市蓬佐文庫がそれぞれ所蔵する薩摩藩・尾張藩の藩邸の絵図、京都府総合資料館の北山アーカイブに含まれる寺地画図と社地画図、19世紀の絵図類、地形図と立命館の入学案内など、多様なものを駆使することになる。

なお、藩邸に関しては、藩屋敷という表現も用いられている。筆者は、基本的には「藩邸」を用いることにするが、先行研究ならびに史料には「藩屋敷」が使われることも多い。

したがって、結果的には不統一にならざるをえない。この点をお断りしておく。

2. 藩邸の地理的実態

1）京都における藩邸

鎌田道隆氏の研究[7]によると、嘉永6（1853）年のペリー来航以来、京都は「幕末政争の舞台と化し」た。「京都は近世都市でありながら城下町ではなかったし、武士の数も極めて少なかった」が、「これまで町人の都市として静かなたたずまいをみせていた京都は、武家の町へとその雰囲気を変え、そして諸大名の相次ぐ京屋敷増設などによって、都市景観もしだいに変容していった」と、同氏は指摘している。

都市景観に変化をもたらしたのは、鎌田氏によると、「大名屋敷・御用屋敷などの築営であ」った。京屋敷をもつ大名数は、17世紀の前半には68、17世紀末で83、幕末の元治元年（1864）年には60、同年の別の絵図では73、そして慶応4（1868）年には74を数えた。これらの数そのものをみると顕著な増加には見えないものの、「複数の屋敷をもつ大名が増加し」、「屋敷そのものが広大なものになっ」た。本研究と直接にかかわる薩摩藩は、元治元年には3つの屋敷を有していた。

享保2（1717）年ごろにまとめられた『京都御役所向大概覚書』[8]の「京都大名屋鋪・拝領地幷買得屋鋪之事」には、「拝領買得屋鋪数合九十六ケ所」が列記されている[9]。その冒頭には、藤堂和泉守の「東堀川通蛸薬師下ル町」の屋鋪が書かれ、二つ目には播州姫路の酒井雅樂頭の「東堀川通二條上ル町」の屋鋪が記載されている。16番目に、松平薩摩守すなわち薩摩藩の屋敷に関して、「錦小路通東洞院東江入町、表口三十三間、裏行四拾六間。右地続東洞院四條上ル町ニ而表口十九間、裏行拾五間四尺所買足。買得大橋金左衛門・藤本彦右衛門両人名代」とある。表が33間すなわち59.4メートルで、奥行きが46間すなわち82.8メートルの敷地で、それに新たに買い足されたのは、表口が19間すなわち34.2メートルで、奥行きが15間あまりで、約27メートルの敷地であった。商人の大橋と藤本が、薩摩藩の名代で購入したのである。現在の京都市街地の中心部に位置する四条烏丸にほど近いところに、この薩摩藩屋敷は位置していた。

尾張藩に関しては、末尾近くの92番目に記載されている。「尾張殿」の屋敷は「錦小路通新町東入ル町」にあり、「買得茶屋長會名代」とあるように、尾張藩とかかわる商人の茶屋長會が、名代となって購入したことがわかる。以上のように、18世紀の初めころには、京都に薩摩藩と尾張藩がそれぞれ1か所の藩邸を有していた。

2）薩摩藩の二本松屋敷

串木野郷士の野元良図による『上京日記』を分析した町田剛士氏の研究[10]によると、薩摩藩の場合、錦小路の藩邸が狭く、多人数を収容できないので、「薩摩藩は文久二年の冬、御所北側の相国寺敷地内に土地を購入し起工、文久三年秋に二本松屋敷を建造し」、それは文久3（1863）年10月までに完成していた。

町田氏は、『上京日記』の記述をもとに、薩摩藩が文久4（1864）年4月までに岡崎にも藩邸を建造し、そこで藩兵の調練が行われたことを明らかにしている。つまり、文久4年までに、薩摩藩邸は京都市街地とその周辺に都合3か所あったことになる。取得の順序でいえば、享保2年までに市街地内部の錦小路で、それから176年後に市街地の北部の、御所の近傍で二本松藩邸を創出し、その直後に鴨川の東側に位置する岡崎でも藩邸を確保していた。

鎌田氏によると、薩摩藩は岡崎の新屋敷をのちに手放し、「その代わりに等持院村に新屋敷をまたこしらえている」[11]。薩摩藩が有した複数の屋敷の中で、本研究に直接にかかわるのは、二本松屋敷と等持院村にあった屋敷である。

つ、映画撮影所の立地とその関係者の居住、ならびに画家の転入などを時系列で整理し、足利氏の菩提寺である等持院の土地所有の変化のなかに、立命館日満高等工科学校の立地を位置づけた[6)]。それとともに、等持院村に隣接する小松原村に存在した薩摩藩の弾薬庫に関しても、地図と関連資料をもとに考察を加えた。

2005年以降における、筆者による研究では、鴨東の吉田村に位置した三高・京都帝大、京都御所の周辺地域に位置した同志社と立命館、高倉通魚棚上ルで発足し、2年後に市街地の北郊に移転した大谷大学、本願寺派総本山の西本願寺の境内で創設された龍谷大学、そして市街地の西郊で、等持院の境内地に設立された立命館日満高等工科学校などが、考察の対象とされた。つまり、筆者の研究は、京都の市街地とその周辺を含む地理的範囲を考察の地域的枠組としてきたことになる。

上記の教育機関のなかで、発足がもっとも古いものは、明治8（1875）年の同志社英学校であり、最も新しいものは、昭和14（1939）年の立命館日満高等工科学校（後の立命館大学理工学部）である。したがって、筆者によるこれまでの研究は、1875年から1939年までの64年間を対象としてきた。

本報告では、これまでの成果をもとに、第一に対象を絞ることにする。同志社・龍谷・大谷および立命館の私立4大学のうちで、大谷大学だけはまとまった農地を転用して、キャンパスを創出した。これは、大谷派の富裕な門徒の寄付によって成し遂げられたことである。しかし、他の3大学は、すでに何らかの利用がされた地面を再開発して、立地したという共通した特徴を有している。三高と京都帝大の場合も、他の3大学とほぼ同様に地面を活用している。以上の理由で、本報告では、ひとまず大谷大学を除外する。

第二に、考察の対象時期を、藩邸が京都で増加した19世紀の後半、特に文久年間から、昭和14年ころまでとする。これが、本報告とこれまでの研究との第二の相違点である。なお、西本願寺が17世紀に創建されたことは、いうまでもない。

上記の二点を踏まえて、本報告の第2章では、同志社と三高・京大とかかわる薩摩藩邸と尾張藩邸に関して整理する。その際、三高の移転候補地になった地域も含めることにする。第3章では、藩邸跡の利用について事実を確認する。第4章では、龍谷大学を創設した西本願寺、ならびに立命館が立地した中御霊社、そして等持院の境内地における立命館日満高等工科学校を対象として、寺社の境内地と大学としての利用との対比を試みる。そして最後に、第5章では、大学創立者の「空間デザイン」と従前の土地利用との比較をおこない、特に立命館の創立者である中川小十郎の「空間デザイン」と尾張藩邸・三高・京都帝大との関連性について考察する。大学が京都の都市景観のなかに創出されていく過程において、大学創立者の「空間デザイン」が論じられていないわけではない。しかし、京都帝国大学の書記官として活躍した中川小十郎は、その後も京都帝国大学との関係を維持しつつ学校経営に邁進した。おそらく彼の脳裏にあった「空間デザイン」を可能な限り明らかにしたいと筆者は考えている。

史料として、鹿児島県歴史資料センター黎明館と名古屋市蓬佐文庫がそれぞれ所蔵する薩摩藩・尾張藩の藩邸の絵図、京都府総合資料館の北山アーカイブに含まれる寺地画図と社地画図、19世紀の絵図類、地形図と立命館の入学案内など、多様なものを駆使することになる。

なお、藩邸に関しては、藩屋敷という表現も用いられている。筆者は、基本的には「藩邸」を用いることにするが、先行研究ならびに史料には「藩屋敷」が使われることも多い。

したがって、結果的には不統一にならざるをえない。この点をお断りしておく。

2. 藩邸の地理的実態

1）京都における藩邸

鎌田道隆氏の研究[7]によると、嘉永6（1853）年のペリー来航以来、京都は「幕末政争の舞台と化し」た。「京都は近世都市でありながら城下町ではなかったし、武士の数も極めて少なかった」が、「これまで町人の都市として静かなたたずまいをみせていた京都は、武家の町へとその雰囲気を変え、そして諸大名の相次ぐ京屋敷増設などによって、都市景観もしだいに変容していった」と、同氏は指摘している。

都市景観に変化をもたらしたのは、鎌田氏によると、「大名屋敷・御用屋敷などの築営であ」った。京屋敷をもつ大名数は、17世紀の前半には68、17世紀末で83、幕末の元治元年（1864）年には60、同年の別の絵図では73、そして慶応4（1868）年には74を数えた。これらの数そのものをみると顕著な増加には見えないものの、「複数の屋敷をもつ大名が増加し」、「屋敷そのものが広大なものになっ」た。本研究と直接にかかわる薩摩藩は、元治元年には3つの屋敷を有していた。

享保2（1717）年ごろにまとめられた『京都御役所向大概覚書』[8]の「京都大名屋鋪・拝領地幷買得屋鋪之事」には、「拝領買得屋鋪数合九十六ケ所」が列記されている[9]。その冒頭には、藤堂和泉守の「東堀川通蛸薬師下ル町」の屋鋪が書かれ、二つ目には播州姫路の酒井雅樂頭の「東堀川通二條上ル町」の屋鋪が記載されている。16番目に、松平薩摩守すなわち薩摩藩の屋敷に関して、「錦小路通東洞院東江入町、表口三十三間、裏行四拾六間。右地続東洞院四條上ル町ニ而表口十九間、裏行拾五間四尺所買足。買得大橋金左衛門・藤本彦右衛門両人名代」とある。表が33間すなわち59.4メートルで、奥行きが46間すなわち82.8メートルの敷地で、それに新たに買い足されたのは、表口が19間すなわち34.2メートルで、奥行きが15間あまりで、約27メートルの敷地であった。商人の大橋と藤本が、薩摩藩の名代で購入したのである。現在の京都市街地の中心部に位置する四条烏丸にほど近いところに、この薩摩藩屋敷は位置していた。

尾張藩に関しては、末尾近くの92番目に記載されている。「尾張殿」の屋敷は「錦小路通新町東入ル町」にあり、「買得茶屋長會名代」とあるように、尾張藩とかかわる商人の茶屋長會が、名代となって購入したことがわかる。以上のように、18世紀の初めころには、京都に薩摩藩と尾張藩がそれぞれ1か所の藩邸を有していた。

2）薩摩藩の二本松屋敷

串木野郷士の野元良図による『上京日記』を分析した町田剛士氏の研究[10]によると、薩摩藩の場合、錦小路の藩邸が狭く、多人数を収容できないので、「薩摩藩は文久二年の冬、御所北側の相国寺敷地内に土地を購入し起工、文久三年秋に二本松屋敷を建造し」、それは文久3（1863）年10月までに完成していた。

町田氏は、『上京日記』の記述をもとに、薩摩藩が文久4（1864）年4月までに岡崎にも藩邸を建造し、そこで藩兵の調練が行われたことを明らかにしている。つまり、文久4年までに、薩摩藩邸は京都市街地とその周辺に都合3か所あったことになる。取得の順序でいえば、享保2年までに市街地内部の錦小路で、それから176年後に市街地の北部の、御所の近傍で二本松藩邸を創出し、その直後に鴨川の東側に位置する岡崎でも藩邸を確保していた。

鎌田氏によると、薩摩藩は岡崎の新屋敷をのちに手放し、「その代わりに等持院村に新屋敷をまたこしらえている」[11]。薩摩藩が有した複数の屋敷の中で、本研究に直接にかかわるのは、二本松屋敷と等持院村にあった屋敷である。

二本松屋敷に関しては、文久3（1863）年ころの状況が表現された絵図が、鹿児島県歴史資料センター黎明館に所蔵されている。絵図の大きさについてみると、南北が160センチメートルで、東西が129センチメートルである。

この屋敷は、L字型になっている。北辺には、「八拾四間弐尺余」すなわちおよそ151メートル、南辺には「石橋町通百四拾八間四尺余」と記載されている。冷泉家・徳大寺家などの公家屋敷と二本松屋敷の間の道は、「石橋町通」と呼ばれ、その長さは約266メートルであった。西辺には「烏丸通百弐拾五間五尺余」すなわち約225メートルとあり、相国寺の南門に向かう参道の一部をなす東辺には、「大門町通三拾壱間」とある。この道の名称は「大門町通」で、東辺の長さは約55メートルであった。

絵図中に記載された距離と、その部分の長さをもとに、縮尺について検討してみよう。石橋町通の長さは約266メートルで、図中の長さは約140センチメートルである。したがってこの数値を手掛かりにする限りにおいて、縮尺は約190分の1となる。しかし、絵図には「弐百分壱図」とあり、縮尺は200分の1で作製されているようである。凡例には黄色、朱色、灰色があり、順に「此色畳」、「此色板」、「此色土」と記載されている。つまり建物の内部に関して、畳が敷かれた部屋は黄色で塗られ、その部屋の畳数が、例えば「八帖」と明記されている。「板」とは、絵図中の「オシ入」、「エン」、「コウシ」「廊下」などのことである。「土」とは、「土間」、「御厩」などである。部屋の畳数が明記されていることからも明らかなように、この絵図は文久3年ころの実態をかなり正確に表現しているように解される。

屋敷の外郭に関しては、堀で全体が囲われていた。その幅は北辺ではもっとも広かったようである。北辺だけに、「堀」と明記されている。おそらく空堀かと思われる。門に関しては、北辺にはなく、南辺に2つ、西辺に2つ、そして東辺に「表御門」がある。門の前では、堀に橋が架かっている。

この絵図は、基本的に平面図であるが、「表御門」だけは立姿的に描かれている。それはこの門がいかに重要であったかを物語っており、それが面する大門町通が、二本松屋敷にとって最重要な道であったことになる、つまり、薩摩藩の二本松屋敷は、東向きであったということができる。

堀の内側の防御施設についてみると、北辺と、東辺の北端部には「高塀」が設けられていた。それら以外では、外郭部には「高塀」は記載されていない。その相違は、建物の配置によるものと思われる、北辺では3棟の「土蔵」が南面して置かれている。それらの土蔵は接していない。北西隅にも1棟の「土蔵」が東向きに建っているが、東隣の「土蔵」と連接しているわけではない。

南辺と、西辺の大部分には、堀の内側で藩兵のための長屋が連接している。ここには「高塀」とは記載されていないので、おそらくこの長屋それ自体が、防御施設でもある、とみなされていたものと思われる。

そのほかに「高塀」が記載されているのは、屋敷のほぼ中央部に位置する建物の周囲である、この建物の名称は記載されていないが、40ほどの部屋からなり、最奥部には「御座之間」がある。したがってこの建物が、この屋敷の中核であることがわかる。「高塀」はそれを取り囲むように配置されている。その「高塀」の北部には「ウエ込」が記されている。そこに樹木を植えることで、防御性を高めようとしたのかもしれない。

以上のように、薩摩藩の二本松屋敷は、「御座之間」を含む建物を中核にして、その周囲に藩兵が起居する長屋と土蔵を置き、更にその外側に「高塀」と堀を擁し、北部では調練のための地面をもつ空間構成になっていたことがわかる

鹿児島県歴史資料センター黎明館には、この絵図とは別に、家老であった小松帯刀の書簡に添えられていた、御所と薩摩藩と二本松屋敷に関わる絵図が所蔵されている。その大きさは、南北が78.0

センチメートルで、東西が42.0センチメートルである。

その絵図に描かれた地理的範囲についてみると、東は寺町通、南は丸太町通、西は烏丸通の3本の道で画され、北に関しては今出川通よりも北の相国寺までが描かれている、この絵図の主題に関しては、書簡の内容をふまえたうえで検討されるべきであるが、二本松屋敷図との関連で、1点だけ指摘しておきたい。

二本松屋敷の南辺には2つの門があった、これらは、東辺の「表御門」と比較すると確かに小さな門であった。しかし、南辺の2つの門のうちで、西側のものは、屋敷の中核にある建物から、すぐに南下したところにある。小松帯刀の書簡に添えられていた絵図を見ると、その門を出ると、徳大寺家と藤谷家の間を抜け、今出川通を越えると、乾御門に直行することができた。乾御門は五摂家のひとつ近衛家の屋敷の南西隅近くにあった。近衛家と島津家との親密な関係を想起すると、南辺の2つの門のうちで、西側の門は、表御門についで重要な役割を有していたように解される。

3)「衣笠薩屋敷地」

慶応4（1868）年に刊行された「改正 京町御絵図細見大成」[12] には、「薩州屋舗」が明記されている。この「薩州屋舗」は洛外に位置していた。その周辺では、農業的な土地利用が卓越していたと解される。

交通路についてみると、今小路と一条通が重要である。今小路は北野天満宮の鳥居前を通り、御土居と紙屋川を越えて、松原村と真如寺の前を過ぎてから、等持院の門前に差し掛かる。等持院は、足利氏の菩提寺である。今小路を挟んで南側には「等持院村」の村形が描かれている。つまり、ここに等持院村の集落が位置していた。ただし注意しておくべきことは、近世村落としての等持院村の境域は、集落の周囲に広がっていたという点である。この絵図では表現されていないが、この境域にも水田や畑、灌漑水路などが存在していることはいうまでもない。

村形の「等持院村」の南に、「薩州屋舗」が位置している。交通路との関係でみると、今小路にも近接しているが、同時に「一条通」にも近い位置にある。この通りが直線的であること、ならびにこの名称からも、古代の平安京以来の道であることは明らかである。この屋舗に駐屯した薩摩藩の兵士は、今小路か一条通を通って、京都市街地に移動することができたはずである。

この屋舗に関して、『尾崎忠征日記』[13] に記述があることが、歴史作家の桐野作人氏による「知られざる京都の小松原調練場」で紹介されている[14]。小西四郎氏の「解題」[15] によると、尾崎忠征は、尾張藩士で尾張藩京都留守居役として活躍し、特に近衛家と密接な関係をもっていた。近衛家は島津家と親しかったので、島津家の情報もそこから入手していたようである。

尾崎忠征は、慶応3（1867）年9月26日に、次のように書いている。

「一荒川甚作江壱通

右は仕かけに而、島津備後人材中村を以、今日中路権右衛門江聞繕試候處、豪傑に而衣笠薩屋敷地に而、調練毎日多人数自身に被引連調練に被相越、昨廿五日なとは、北野天満宮に而群衆之中を人数大勢引具、調練に被出、衆人胆を潰し居との趣、権右衛門より中村江咄之趣承知として申遣候事」

これは、尾崎忠征が、自身が荒川甚作に出した書状の内容を控えたものかと思われる。桐野作人氏の解釈に基づくと、島津久光の三男である島津備後が、下線を付したように、「衣笠薩屋敷地」で多人数の調練の采配をふるった。昨日の25日には、備後が大勢の藩兵を率いて北野天満宮の群衆の中を歩き、人々が胆を潰したとある。毎月25日は、現在でも「天神さん」と呼ばれて親しまれている市がたち、大勢の人出があることはよく知られている。この藩兵が、どこから北野天満宮に

出向いたのかは明確ではないが、おそらく等持院村の境域から今小路を通ったのではないかと思われる。

「衣笠薩屋敷地」は、桐野作人氏によると「小松原調練場」であり、それが創出された年に関して、同氏は『桂久武日記』を典拠にして慶応2（1866）年としている。おそらくここには、調練が行われる場所だけではなく、藩兵の宿舎もあったのではないだろうか。

「薩屋敷」という表現は、屋敷と呼ばれるだけの施設がここにあったことを示していると思われる。その実態に関して何もわかっていないが、慶応4（1868）年の「改正 京町御絵図細見大成」にある「薩州屋舗」がそれだと思われる。つまり、慶応2年～4年には、等持院村の境域で、薩州屋舗は、等持院村の集落より南に位置していたことはおそらく間違いない。

桐野作人氏は、前掲の「知られざる京都の小松原調練場」のなかで、霊山歴史館が所蔵する「小松原調練場の弾薬庫古写真」を示している。この弾薬庫に関して、断片的ながら下記の諸点がおおよそあきらかになっている。

第一に、昭和29年に京都市建設局が発行した、3000分の1地形図のなかに、「火」という文字が記載され、それは土塁のようなもので囲まれている。おそらくこれが、薩摩藩の弾薬庫であり、「火」とは火薬のことを意味しているように解される。この地形図の図歴は、「大正11年測図、大正14年製版、昭和10年修正測図、昭和11年製版、昭和27年修正」となっている。したがって、大正11年に測量が行われた際には、弾薬庫はまだあったのかもしれない。

第二に、昭和9（1928）年刊行の『京ところどころ』で、画家の吹田草牧は、衣笠山麓に関して「この辺一帯は明治の初年まで島津藩の調練場になってゐて、その火薬庫は一昨年までここに残っていた」と書いている[16]。「一昨年」とあるだけで、明確な年はわからないが、おそらく昭和6年ころまで、ここには薩摩藩の弾薬庫があったものと解される。

この図で、いずれも推定ながら、弾薬庫と「薩州屋舗」の位置をみると、慶応2年～4年には、この地域一帯が薩摩藩によって藩兵の調練に用いられていたように思われる。

4）尾張藩の吉田屋敷

後藤真一氏の研究によると、吉田「屋敷の設置は文久3（1863）年末で、吉田村に弐万坪程の土地を、尾州茶屋家を名代として購入している」[17]。吉田屋敷は、伏見のそれと同様に、「居所としての機能を持」っていた、と同氏は指摘している。

明治2年の「京町御絵図」[18] には、「尾張屋敷」と書かれている。その北東側に位置する白川村は、白河女による花卉の行商で知られた村である。そこには「かうじん口へ廿丁、今出川口へ十八丁」と書かれている。つまり、白川女が鴨川を越えて京都の市街地に行く際には、西にほぼ直線的に伸びる道を通って、鴨川を渡り、右岸の今出川口に向かうか、あるいは荒神橋に向かう斜めの道を通ったものと思われる。しかし、荒神橋に向かうために使われていた道は、ここに創設された「尾張屋敷」に取り込まれてしまった。『京都大学百年史 総説編』によると、「新たに建設されたこの尾張藩屋敷によって、荒神橋から白川村へと斜めに走る古くからの白川道が遮断されてしまった」[19] のである。

吉田屋敷に関しては、2枚の絵図が名古屋市蓬佐文庫に所蔵されている。同文庫の資料番号にもとづいて、本報告でも945と946という番号で叙述することにする。945と946はいずれも「吉田御屋敷惣図」と呼ばれているが、サイズは微妙に異なる。945のそれは南北が116.6センチメートルで、東西が84.8センチメートルである。一方、946のそれは南北が114センチメートルで、東西が82.4センチメートルである。同じ地理的範囲を表現する絵図ではあるが、946のほうがわずか

に小さい。

『京都大学百年史 総説編』[20] には、946 が掲載され、この絵図に基づいて尾張藩吉田屋敷に関して叙述されている。それには、「当時の状況を記した『吉田御屋敷惣図』によると、敷地は南北に長い矩形であり、敷地の四周には内側に「土居」と「矢来」をめぐらし、外側に「カラ堀」を掘っている。南辺の門は、大きく口を開け、西よりの南御門を正門とし、東よりに通用門を配している。北辺中央、東辺中央、西辺中央に脇門を開ける。東門の辺りから、水路が西へと流れ、西辺近くの長屋の手前で南に折れ、敷地南面隅へといたっている。

敷地の中央南よりに屋敷、それを取り囲むように、東、西、北に多数の長屋を配置している。相当な数の武士が駐屯していたようである。中央の空地には、軍事教練のための馬場も設けられている」（下線は筆者による。以下同様。）と書かれている。この「屋敷」とは、吉田屋敷のなかの中核となる建物を意味している。

946 を見ると、この説明にあるように、四周には「土居」と「カラ堀」が設けられている。土居には「土居上矢来」とあるので、土盛で周囲を囲み、その上に「矢来」が設えられて、外敵に備えたのである。

「東門の辺りから、水路が西へと流れ」とあるように、藩邸の敷地内を水路が流れていた。『京都大学百年史 総説編』は言及していないものの、東門から敷地内に入ったあたりで、この水路には「水車」が位置していた。この水車が何に使用されていたのかは判然としないが、この藩邸での生活には必要とされた施設であったのであろう。

この水路は、水車から西に向かい、途中でほぼ 90 度南に折れている。おそらくこの屈曲は本来的なものではなく、敷地の南半部に屋敷を建てるために、水路の向きを西向きに変えたことを示しているように思われる。明確な根拠はないが、この水路は、もとの白川道に沿っていたのではなかったかと推定される。それに加えて、この水路には、屋敷の内部の庭に造られた「御泉水」からの水路が、屋敷の西で合流している。「御泉水」にある水はどこから供給されていたのであろうか。この絵図には示されていないが、「御泉水」に東から流入する小さな水路があったのではないか、と思われる。

屋敷の中で、「御泉水」の南側にある「御座所」が、もっとも最高位の人物がいるところであろう。役職者が執務する部屋も、屋敷には含まれている。この屋敷の周囲に、藩兵が起居した 16 棟の「御長屋」が配されている。そのうちで、北部の 1 棟のみが二階建てであった。平屋建ての「御長屋」では収容できない人数の藩兵が、ここにはいたと解される。

先述の薩摩藩の二本松屋敷と比較すると、16 棟の「御長屋」はそれぞれ独立している点は、二本松屋敷と基本的に異なる。しかし、藩邸の北部には、建物がない地面が位置している点は、共通している。その地面の北端部で、土居に近いところに「練武場屯所」と記された小さな建物がある。つまり、この地面は「練武場」と呼ばれ、ここで藩兵の調練が行われたのであろう。

蓬佐文庫によると、945 は 946 の写しである可能性がある、とみなされている。おそらくその根拠は、外郭部の表現が後述のように、946 の方がいささか簡便であることによると推測される。945 では、「土居上矢来」と「カラ堀」とが表現されていたが、946 ではその区別はなく、「カラ堀」とだけ記されている。これは、「土居上矢来」が無くなったのではなく、単に記載が略されただけかと思われる。

それ以外の相違点を指摘すれば、945 のほうが描かれている物置の数がわずかながら少ない。946 では、南辺にある門に「南御門」と書かれているが、945 ではそれには「表御門」と記されている。

もう一つ異なる点は、946 では、「御座所」を中心とする屋敷の北半部が、赤色の線で他と画され

ていることである。藩邸の中核を強調する意図があったのかもしれないが、推定にとどまる。

以上のように、薩摩藩二本松屋敷と尾張藩吉田屋敷をみると、「御座所」を含む建物を中核に置き、藩兵が生活する長屋をその周囲に配置し、その外側に高塀もしくは土居を設け、さらにその外側にカラ堀で周囲を固めていた。このほかに、藩邸のなかに調練のためのいわばグランドを備えていたことになる。このような空間構成が、この当時の京都に位置した藩邸に共通していたかいないかについて、確認はとれていない。それらに加えて、二つの藩邸の相違点を言えば、薩摩藩二本松屋敷は東向きであり、尾張藩吉田屋敷は南向きであった。この点は、藩邸の跡地利用でもひとつの論点になるはずである。

5）藩邸の廃止

京都における藩邸が明治初年にどのように変化したかに関して、鈴木栄樹・牧知宏両氏の研究がある[21)]。明治3（1870）年の行政文書「諸藩邸上地件」は、「明治3年2月に出された太政官布告に応じたもので、各藩から藩邸地所持の有無、桑茶等の植付け場所の存否、あるいは藩邸地の売却・返上・譲渡の意向が届けられた」ものである。それがまとめられた表をみると、名古屋藩（尾張藩）と薩摩藩はそれぞれ藩邸を所持しており、薩摩藩は藩邸のすべてもしくは一部を売却・譲渡・返上する意向を有していた。

藩邸に関するその後の動きの中で、明治5年1月の太政官布告が重要であると指摘され、「すべての藩邸地をいったん京都府へ上邸の上、入札による払い下げという形で処分されることになった」。それに関わって作成された表をみると、元鹿児島藩には、二つの藩邸が記載され、一方が伏見町呉服町のもので、他方が烏丸通り東に入、相国寺門前のものであった。そうすると、明治5年までに錦小路の藩邸と、等持院村の藩邸は、薩摩藩の手を離れていたものと思われる。

一方、元名古屋藩（尾張藩）の藩邸に関しては、新町蛸薬師下ルと錦小路室町西入ルの2か所になっていた。つまり、吉田にあった藩邸を、元名古屋藩（尾張藩）は明治5年までにおそらく売却していたのであろう。

尾張藩屋敷に関する後藤真一氏の論攷[22)]によると、錦小路の屋敷は、明治3（1870）年に廃止されるまで継続し、そこには「京都買物奉行」という役職が置かれていた。幕末に創出された吉田の藩邸に関して、後藤氏は「徳川家御住居沿革調書」をもとに、明治4（1871）年に処分されている、と述べている[23)]。

3. 藩邸跡の利用

1）同志社による旧藩邸と宮家・公家屋敷の転用

新島襄は、明治8（1875）年11月29日に、寺町丸太町上ル松蔭町の高松保美邸を借りて、同志社英学校を開校した。そこにはかつて中井家の屋敷があった。同家は、五畿内と近江の大工を支配し、幕府や朝廷の建築物を造営した。つまり、同家の屋敷は明治8年までに高松家の所有となり、新島がそれを借りたのであった。明治維新後には、京都御所の周辺地域では、土地所有に関わる大きな変動があったことが推察される。

相国寺の南側に位置した薩摩藩・二本松屋敷の跡地は、桑畑になっていたといわれている[24)]。同志社英学校は、明治9（1876）年にここに約5,800坪の土地を得て、校舎二棟と食堂を建てて、移転した[25)]。河野仁昭によると、薩摩藩邸の跡地に「移転以後、新島は募金などによって校舎や寮を建てただけではなく、御所周辺に売地があると、無理算段をして購入につとめ」た[26)]。明治9年に、「旧二条邸の敷地の一部、4,989坪を」女学校用に買い入れている[27)]。明治22年には、寺町通鞍

馬口下ルにあった彦根藩邸の跡地を同志社は購入している[28]。今出川通に面していた宮家と公家の屋敷のうちで、「明治維新後、二条邸は西隣の伏見宮邸とともに宮内省に移管され、明治16年10月に設立された平安義黌に貸し下げられた」[29]。後に、二つの屋敷跡のほとんどが、同志社のキャンパスとなった。同志社は薩摩藩・二本松屋敷を出発点として、周辺の宮家・公家屋敷を取得して、発展の基礎を築いたのであった。

2）第三高等中学校の京都への移転

明治19年2月2日の大阪朝日新聞には、第三高等中学校の移転先として、伏見の桃山がいったん候補地となったものの見合わせることになり、その後には東成郡天王寺村茶臼山の南の地が候補地となったと書かれている。しかし、明治19年10月28日の同紙には、次の記事がある。

「第三高等中学校は大坂府下に置かるる制定なるも、同府下は教育に適当せざるの地形なれば、之を改めて京都府下に置かるることに内決ありて、その筋より同校に適当の地形を取調べらるる都合にて、這は葛野郡谷口村小松原村等持院村等の内にて、七万坪の地を撰み、之が設立地に充つるこそ適当なれと当府庁に於て見込まれ、目下其地形等の調査中なる由」

明治19年の秋には、関係者が、小松原村・等持院村・谷口村を訪れた。どこをどう見て回ったのかはわからないが、7万坪の土地をどのように確保するかが検討されたのであろう。

『京都大学百年史 総説編』[30]によると、移転先の候補地はいくつかあった。一つは、「葛野郡宇多野の谷口村を中心に、西は仁和寺、南は花園妙心寺、北は等持院にまたがる7万5000坪の地、第2に愛宕郡紫竹大門村のうち、大徳寺の南から船岡山建勲神社の北にいたる地、そして第3に愛宕郡吉田村のうち、吉田神楽岡の西方、旧尾張藩屋敷跡、であ」った。

『京都大学百年史 総説編』[31]には、明治19年の「暮れ頃までは、等持院から竜安寺にかけての洛西界隈が最有力であった」と書かれている。等持院村の境域には、慶応4（1868）年に刊行された「改正 京町御絵図細見大成」[32]ですでに確認したように、「薩州屋舗」が明記されていた。森有礼文部大臣と折田彦市校長は、いずれも薩摩藩出身であり、両者はここに短期間ながら薩摩藩邸があったことを知っていたに違いない。

3つの候補地のうちで、最終的には、吉田村が選択された。明治20年1月5日の「大阪朝日新聞」には、次のように書かれている。

「夫の葛野郡谷口村等持院村村内に定めらるる筈なりし第三高等中学校の位置は、旧臘二十七日、森文部大臣の見分ありたる末、更に愛宕郡吉田村旧名古屋藩邸の跡と定められ、其建築工事も本年四月上旬と内決せられたるよしなり」

この記事には、他の2候補地が外れた理由は記載されていないが、『京都大学百年史 総説編』[33]には、「谷口村や大徳寺船岡山は水質に難点がある」とされ、吉田村に関しては、出典は示されていないが「水質良純なるうへ、東の方の吉田山を除く三方は皆田野にして、遥か西に賀茂川をひかえ、北に百万遍知恩寺ありて至極の清地」という評価が与えられた、とのことである。「第三高等中学校の敷地は、尾張藩屋敷跡の矩形の敷地で、4万9,570坪という広大な面積をもっていた。西側の敷地境界線の形は、第三高等中学校を経て、京都大学に受け継がれている」[34]と、書かれている。

明治19年2月2日の大阪朝日新聞には「葛野郡谷口村小松原村等持院村等の内にて七万坪の地を撰み」とあったが、最終的にはそれよりもおよそ2万坪ほど狭い、尾張藩屋敷跡が選択された。

『京都大学百年史 総説編』[35]には、「明治20（1887）年4月末には愛宕郡役所を通じて田畑の買い上げが始まり、6月1日には早くも着工の運びとなっているが、この間、かなり強引な土地の収用が行われたもののようである」と記している。この記述をもとにすると、尾張藩吉田屋敷が明

治5年までに廃止されて後に、明治20年ころまで同敷地は農地に転用されていたことになる。

『京都大学百年史 総説編』[36] には、「第三高等中学校の敷地は、尾張藩屋敷跡の矩形の敷地で、4万9,570坪という広大な面積をもっていた」とある。屋敷跡が農地に転用されていたとしても、屋敷の当時の範域が他と画された状態であったと想像される。それを推し量る根拠になるのが、『京都大学百年史 総説編』[37] にある「第三高等学校吉田学舎建物配置図」である。この図をみると、北辺と東辺、並びに南辺の東部は、二重線で表現され、北辺および南辺の東隅近くに「土塁」と明記されている。これらが、蓬佐文庫945の「吉田御屋敷惣絵図」にある「土居上矢来」の「土居」を継承したものであれば、藩邸が廃止された後にも、土居は存続していたのかもしれない。「第三高等学校吉田学舎建物配置図」の北辺をみると、西隅近くで土塁が途切れている。945では、北辺の西寄りに脇門が描かれていた。この脇門が、第三高等学校の敷地となってからも門として使われたのであろうか。もしそうであれば、北辺の土居は、明治5年までに尾張藩邸が無くなってからも、実態的には存続していたのかもしれない。

しかし、東辺に関しては、いささか注意を要する。945ならびに946でも、尾張藩邸は矩形すなわち長方形であった。しかし、「第三高等学校吉田学舎建物配置図」におけるこの敷地は矩形ではなく、正方形にかなり近い。明治25年の仮製地形図でも、第三高等学校の敷地はけっして矩形ではないと思われる。『京都大学百年史 総説編』[38] には、第三高等学校の敷地は、「もとの尾張藩屋敷に加え、東方にかなり拡大されたようにみえる」と指摘されている。そうであれば、「第三高等学校吉田学舎建物配置図」の東辺の土塁は、尾張藩邸のものではないと解される。

なお、「第三高等学校吉田学舎建物配置図」にも、945と946にもあった水路が描かれていることを確認しておこう。ただし、その位置が往時のままであったかどうかは、筆者にはわからない。

第三高等学校では、『京都大学百年史 総説編』[39] によると、「明治26（1893）年には敷地の南辺中央より少し西より、吉田神社参道に向かって正門が開かれた」のであった。そしてそれに関連して、「多くの建築が南面しており、正面性が強調されてい」た。「第三高等中学校は、広大な敷地に対して施設全体を南側に寄せて配置していた。これは、設立当時から大学昇格を念頭において、拡充用の土地を確保するためであったという」と説明している。「本校は、（中略）南を正面として建設された」と明記されている。この場合の「本校」とは、学校全体を意味しているのではなく、本部のある建物を意味しているようである。つまり、第三高等学校は南向きに立地したのであった。

ここで我々は、946では、南辺にある門に「南御門」と書かれているが、945ではそれには「表御門」と記されていたことを想起しよう。つまり、尾張藩吉田屋敷も南向きであった。『京都大学百年史 総説編』には、尾張藩吉田屋敷が南向きであったので、第三高等学校も南向きになったとは書かれてはいない。『京都大学百年史 総説編』[40] には、繰り返しになるが、「第三高等中学校の敷地は、尾張藩屋敷跡の矩形の敷地で、4万9,570坪という広大な面積をもっていた」とあるように、農地に転用されてはいたが、範域としては一括して第三高等学校の敷地となったのであろう。藩邸当時の建物はおそらく残ってはいないと想像されるが、正門をどこに置き、建物をどう配置するかを考案する際に、かつてそこにあった尾張藩吉田屋敷の有様が、多少なりとも影響したのかもしれないが、推定の域をでない。それはともかくとしても、後に立命館大学の前身である京都法政学校を創立した中川小十郎が見た第三高等学校のキャンパスは、間違いなく南向きであった。

3）京都帝国大学

京都で最初に設立された大学は、京都帝国大学である。その設置が決まったのは、明治30（1897）年のことであった。『京都大学百年史 総説編』[41] によると、京都帝大創立の具体案が検討されたの

は、西園寺公望が文部大臣のときであった。西園寺は、明治27年10月から明治29年9月まで文部大臣を務めた。中川小十郎は、西園寺文部大臣の秘書官であった。明治30年6月に、文部省専門学術局長の木下廣次が京都帝大の総長になり、中川は書記官に任命されている。

『立命館百年史 通史一』[42]には、「中川小十郎はこの間、はじめ木下廣次局長のもとで専門学務局に勤め、ついで文部大臣秘書官として西園寺に直属、西園寺文相案の作成とその実現に力を尽くしている。そして『設置令』の公布とともに発令された京都帝国大学の主要人事において、中川は書記官（初代事務局長）として大学業務を総括し、京都帝国大学初代総長に就任した木下廣次とともに大学創設に当たることになった。（中略）創設事業が一段落して翌年文部省に戻った中川は、二度目の文相に就任した西園寺のもとで文部書記官兼文部大臣秘書官兼文部参事官となったが、文相が交代すると、秘書官を辞し、1898年7月5日、一切の官職を降りた」のであった。

『京都大学百年史 総説編』[43]には、「明治30年（1897）年の京都帝国大学創立とともに、三高の敷地と建物が本学に譲られ、本学の成長はそれらを核として始まった。三高の本校はそのまま京都帝国大学本館となり、当初は理工科大学、法科大学の教室、事務室などに用いられた」とある。つまり、京都帝国大学の正門も南面しているのである。

4. 寺社地の転用

1）西本願寺における龍谷大学

龍谷大学の本来の名称は、「佛教大学」であった。この名称では大学への昇格がむつかしいという文部省当局の指示をうけ、西本願寺の山号「龍谷山」をもとに、龍谷大学に名を改めた[44]。

同大学が創設された場所は、西本願寺境内の南西隅である。明治4（1871）年に作成された『寺地画図』には、「本山 本願寺画図」が含まれている。それをみると、図は西を上にして描かれ、南端には七条通が、西端には大宮通が、そして東端すなわち図の下端には、堀川通よりも一本東側の西中筋が描かれている。境内には、「本堂」、「祖師堂」などの建物の配置が精細に記載されている。描出の都合かと思われるが、興正寺の建物配置も併せて記されている。図の南西隅をみると、外縁部には「町屋」が見られるが、「坊官 下間（しもつま）屋鋪」ならびに「家司 平井屋鋪」などと書かれた複数の建物が位置している。下間家は、本願寺の坊官を務めた家で、近世には坊官の筆頭として本願寺の寺務を担当したが、明治4年に坊官制が廃止され、本願寺の行政との関係は絶えた[45]。下間家が坊官として果たした役割と、その制度がなぜ廃されたのかに関して、筆者の調査は及んでいない。それはひとまずおいて、「坊官 下間（しもつま）屋鋪」ならびに「家司 平井屋鋪」が並ぶところから、建物が撤去されて、明治12（1879）年に、西本願寺大教校が建設された。これが、龍谷大学の前身である。

つまり、龍谷大学は、西本願寺境内の再開発によって誕生した、ということができる。

2）中御霊社と京都法政学校

中御霊社は、御所の東方に位置していた。この社は、『京都御役所向大概覚書』[46]の「洛中洛外神社祭礼之事」の中で上御霊神社に関する記載に登場する。

上御霊神社の祭礼にあたって、神輿は次のルートで神幸した。「七月十八日御出之節、神輿貳基上御霊前之町を西江、室町ヲ南江、今出川通ヲ東江、寺町ヲ南江上御霊之旅所中御霊江神幸。八月十八日祭礼之節、中御霊より寺町北江、今出川西江、烏丸南江、下長者町ヲ西江、室町北江、上御霊前之通ヲ東江、本社江帰座」とあるように、神輿は、7月18日に上御霊神社から中御霊社に運ばれ、1か月間、そこに置かれ、翌月の8月18日に再び上御霊社に戻された。中御霊社がいつごろ創設されたのか、当初からそれが「上御霊之旅所」であったのかどうか、など詳細に関して筆者の調査は

及んでいない。それはともかく、享保2（1717）年ごろまでに、中御霊社は上御霊社の関連施設として位置づけられていたとみなされる。

明治4（1871）年の『社地画図』には、中御霊社に関して記載されている。その添え書きには、「上御霊社旅所」とあるので、18・19世紀を通じて、そこは「旅所」であった。中御霊社の東辺、南辺、そして西辺には、町屋が連なっている。『社地画図』を見ると、西北隅にも町屋があり、その東隣には水茶屋が位置している。要するに、神社の境内に、歓楽機能も備わっていたものと解される。なお、町屋には「貸地」と付記されているので、この神社は境内の縁辺部に借家を設けていたことになる。

『社地画図』を見ると、中御霊社には、二つの鳥居が記載されている。一方が西側にあり、他方が南側にある。『社地画図』をみると、西側には「表門」と明記され、その幅は「三間半」すなわち6.3メートルであった。それに対して、南側のそれには、「裏門」とあり、その幅は「二間四尺五寸」で、約2メートルであった。つまり中御霊社は西向きであった。中御霊社の南側の道は、広小路と呼ばれるが、これは火災時の延焼を防ぐために設けられたもので、本来的に神社の正面になる道ではない。

表門から入ると、その左に「二間四方」の「井館」がある。正面には、西向きに「三間四方」の「拝殿」があり、その東側に、幅が「五間」で、奥行きが「六間」の「本社」が位置している。

表門が西側にあり、南側に小さい門がある点は、上御霊神社や下御霊神社と同様である。

この中御霊社もしくはその跡地に、京都法政学校は、鴨川畔の「清輝楼」という名称をもつ3階建ての木造建築物から、明治34年12月に移転した。大正元（1912）年には、「拝殿」と「社殿」が位置した境内は、京都法政学校の創立者である中川小十郎の所有になっていた[47]。その経緯に関して、筆者は何も把握できていない。

中川小十郎は、中御霊社周辺の地筆も購入して、敷地の拡大をはかった。彼が創立した京都法政学校の正門は、広小路に面する南側に設けられた。中御霊社は、西向きであったが、中川が南向きを選択したのである。複数の建物を擁するキャンパスを創出するにあたって、中川小十郎がどのような「空間デザイン」を抱いていたかはわからない。しかし、キャンパスを創出する際には、正門をどの位置に置くかは、その「空間デザイン」の基本点である。この点から言えることは、中川は南向きのキャンパスを造ることを考えていたことは間違いないと思われる。

3）等持院の境内地と立命館日満高等工科学校

京都帝大の中にあった私立の電気工学講習所を立命館が引継ぎ、北大路の敷地に、立命館高等工科学校を昭和13年に創立した。それを引き継ぐ立命館日満高等工科学校の建設工事は、昭和14年3月から等持院北町で始まった。なお、昭和13年5月に、用地の売買契約は、立命館と等持院との間で成立している。

創立者の中川小十郎は、立命館日満高等工科学校の建設にあたって、京都周辺の候補地を視て回ったようである。最終的に、等持院の境内地に決めたことには、彼が等持院の檀家総代であったことと関わるといわれている。彼は、「寺僧の案内で山麓一帯を歩き回り、広い茶畑やくぬぎ林、竹林、大小二つの池を含めて、三万坪を越える面積のあることを確認し」[48]た。

立命館日満高等工科学校の敷地は等持院の所有地であったが、龍谷大学が創設されたような寺院の敷地内ではなく、衣笠山の山麓と等持院の間の土地であった。その状況を、京都府総合資料館所蔵で、明治4（1871）年～明治6（1873）年に作成された「境内外区別原図」に収録される「城州葛野郡北山 等持院 麓絵図」をもとに確認してみよう。そこには、「尊氏公荼毘所」、5か所の墓地、

２か所の「開拓地」、ならびに１戸の「百姓屋」が位置していた。５か所の墓地のうちで、最奥部に位置するものが最も広く、そこに至る参道が設けられていた。

『立命館日満高等工科学校概況（昭和 16 年度）』[49] に掲載された地図をみると、同校の正門はこの墓地参道の南端部に設けられ、墓地参道の東側と西側に校舎が建てられていたことがわかる。つまり、立命館日満高等工科学校は、南向きに建てられたのである。

5. 大学創立者の「空間デザイン」

1）藩邸の跡地利用

薩摩藩・二本松屋敷の跡地が同志社のキャンパスになり、尾張藩・吉田屋敷の跡地が第三高等中学校（第三高等学校）のキャンパスになった。後者は、後に京都帝国大学に譲渡された。藩邸から直接的に学校の敷地となったわけではないが、それぞれの範域はかつての藩邸のそれをほぼ踏襲している。いわば範域としては、藩邸が継承されたといえるかもしれない。

新島襄が、創設されるべき建物の規模とその数を計画し、それらをどのように配置しようと考えたのかに関して、筆者の調査は及んでいない。それを推し量るための手ががりになる可能性があるのは、正門の位置である。どこから入構するかが、キャンパス内での行動を決める基本点となる。そうすると、烏丸通に正門を置いたこと、言い換えるとキャンパスを西向きにしたことに、創立者である新島襄によるキャンパスの「空間デザイン」の基本点であったはずである。

なぜ、正門が北辺に置かれなかったのか。明治 25（1892）の仮製図でみると、北辺は、相国寺の境内に接しており、門を造るための道がそこにはなかった。南辺には、公家の屋敷が連なっていた。二本松屋敷の絵図で検討したように、徳大寺家と藤谷家との間には、乾御門につながる道があった。しかし、二つの公家屋敷の間の細い道に面して正門を置くことは適切ではない、と考えたのではないか。それでは、東辺は正門の位置として適当ではなかったのか。たしかに、薩摩藩・二本松屋敷の表門は、東辺に位置していた。この表門は、南から相国寺に向かう参道に面していた。つまり、東辺に正門を置けば、相国寺の参道に面することになる。それは、キリスト教に基づく同志社の正門の位置としてはふさわしいものではなかったのではないか。そして詰まるところ、正門には西辺がもっとも適していたのではないかと推定される。

第三高等中学校が、尾張藩・吉田屋敷の跡地に移転する際に、校長の折田彦市がどのような「空間デザイン」を構想していたかに関しても、筆者の調査は及んでいない。おそらく、移転時までに吉田屋敷の敷地は農地になっていたと思われる。建物の一部か門の跡などが残っていたのであろうか。残念ながら、それを把握できていない。しかし、藩邸の跡地が、農地になっていたとはいえ、一括されて学校の敷地に転用された。その際に、藩邸であったころの施設配置が、「空間デザイン」を考案する際のヒントになった可能性はあるように思われる。

それを推し量る手掛かりの一つは、幕末に吉田神社の鳥居が建てられ、かつての藩邸の南辺がそれへの参道となっていたことが指摘される。そのほかに、945 と 946 の絵図でも把握した、藩邸の中を流れる水路が、建物の配置をきめる際の基準になった可能性がある。藩邸を創設する際に、本来の流路は北にずらされたと思われるが、明治 25 年の仮製地形図をみると、その水路を挟んで南側と北側に建物が建っていることも、建物の配置に際して、水路が基準にされたことを示唆しているように思われる。おそらく第三高等中学校の正門の位置は、尾張藩・吉田屋敷のそれをほぼ踏襲したのではなかったかと推定される。

2）寺社の境内地

西本願寺の境内の南西隅に創出された龍谷大学は、その敷地の東辺に正門が位置している。その敷地のおよそ半分は、坊官の下間家の屋敷であった。同家の屋敷は、猪熊通を進み、七条通から西本願寺の敷地に入ったところで、東側にも位置していた。しかし、西本願寺が明治 12（1879）年に大教校を設立した際には、東側に位置する下間家の屋敷は、その敷地には取り込まれていない。そして、猪熊通から西本願寺に入る門を正門とはせずに、その内側で、東向きの位置に正門を置いたのであった。その理由に関して、筆者は史料的に確認できているわけではない。しかし、西本願寺の最も重要な建物である、御影堂と阿弥陀堂は東を向いていることからも明らかなように、同寺自体が東を向いている。したがって、龍谷大学もそれらと一体のものとして、当然のこととして、東向きに創出されたのではないかと思われる。

それでは、キリスト教にも仏教にもかかわりのない立命館の場合はどうなのか。京都法政学校すなわち後の立命館大学広小路キャンパスと、立命館日満高等工科学校すなわち後の立命館大学衣笠キャンパスは、ともになぜ南向きなのであろうか。これは、創立者の中川小十郎の「空間デザイン」に基づくものと思われる。

中川が書記官として京都に着任した時に初めて見たキャンパスは、第三高等学校のそれであった。それは、尾張藩・吉田屋敷と同様に、南向きであった。そして彼が書記官として創建に努力した京都帝国大学も、同じく南向きであった。しかし、だからと言って、中川小十郎が自ら創出したキャンパスも南向きとした、とする史料的な根拠は見いだせていない。その傍証にもなりえないが、下記のような京都帝国大学と立命館との関係は、根拠を探すための糸口にはなるかもしれない。

第一に、大正 2（1913）年に認可された「財団法人立命館寄附行為」の第 6 章には、解散に関する規定があり、その中の第 19 条が重要である。それには、「本財団解散スルニ至リタルトキハ協議員会ノ決議ヲヘタル後主務官庁ノ許可ヲ得テ其財産ヲ京都帝国大学に寄附スルモノトス」[50] とある。中川小十郎が書記官として京都帝国大学の創建に貢献したことが、解散時に財産を同大学に寄附するという判断につながっていると解される。

第二に、京都法政学校の創設にあたって、中川小十郎は恩師の木下廣次・京都帝国大学総長の後援を受け、「教学面では法科大学教授の織田萬、井上蜜、岡松参太郎の協賛を経て、京都法政学校創設の実務作業」[51] をおこなった。そして、夜学校であった京都法政学校の教壇に実際に立ったのは京都帝国大学の教官であった。

第三に、昭和 14 年創立の立命館日満高等工科学校で開設された学科は、機械工学科、自動車工学科、航空発動機科、電気工学科、応用化学科、採鉱冶金学科、建築工学科などの 7 科であり、「教員は（中略）各科二ないし三名の専任教員と京都帝大工学部の教員の兼任で構成されていた」[52] のであった。

これらの事実だけで、中川小十郎が南向きのキャンパスを創出したことを説明することはできない。しかし、いうならば彼が強く抱いていた京都帝国大学との一体感が、それと同様の南向きを選好したと考えるのは、うがちすぎであろうか。

6. むすびにかえて

これまでに筆者が発表した 4 本の論文を踏まえて、本報告のテーマを設定した。4 本の論文が対象とした時期は、1875 年～ 1939 年であったが、本報告では、直接的には文久 3（1863）年～ 1939 年を対象とした。文久 3 年を起点にしたのは、藩邸を研究の枠組みに入れたことによる。これまでの研究でも、同志社のキャンパスが薩摩藩邸の跡地に創設されたこと、ならびに第三高等中学校と

京都帝国大学が、尾張藩邸の跡地に創設されたことは、当然のこととして踏まえてきた。しかし、藩邸の地理的実態を絵図をもとに考察したことは、筆者にとって初めてのことであった。

京都における大学を歴史地理学的に論じた研究は、筆者による4本の論文のほかには、おそらく見いだせない。また、藩邸の地理的実態も、歴史地理学者によってこれまでに考察されていない。

京都における藩邸の中で、後の教育機関と関わるものとして、我々は三つの藩邸を把握した。第一に、薩摩藩の二本松屋敷であり、第二に、尾張藩の吉田屋敷、そして第三に等持院村の境域に存在したとみなされる薩摩藩屋敷である。二本松屋敷の跡地は、新島襄によって同志社のキャンパスとされた。第三高等中学校が大阪から京都に移転する際には、三つの候補地があり、そのうちの一つが等持院村・谷口村あたりであった。すでに本文中で詳細に論じたので、再論は避けるが、結果的に、吉田屋敷の跡地が、第三高等中学校の移転先となった。

二本松屋敷も吉田屋敷も、直接的に同志社と第三高等中学校に転用されたわけではない。その点は踏まえておくべきである。新島襄と折田彦市が、施設配置に関わって、かつての藩邸の有様を継承したのか、あるいは拒絶したのかが、本報告で論じられた。その際に、創立者の「空間デザイン」を推察することを試みた。そのための糸口として、正門の位置、言い換えると、そのキャンパスがどの方向を向いているかを手掛かりにした。

二本松屋敷の「表御門」は、かつて相国寺の参道に面していた。つまり、二本松屋敷は東向きであったが、新島は烏丸通に面したところに正門を置いた。つまり同志社は、西向きにキャンパスを構えたことになる。

吉田屋敷の場合、「表御門」は南辺にあった。つまり、この屋敷は南向きであった。第三高等中学校のちの第三高等学校も、そして京都帝国大学も、門の位置そのものに変化はあったとしても、基本的に吉田屋敷のころと同じく南向きであった。

藩邸跡、ならびに宮家・公家屋敷跡が、教育機関の敷地として転用されることが、いつまで継続したかについて、筆者は確認できていない。とはいえ、中川小十郎が京都法政学校の敷地として、中御霊社、もしくは中御霊社の跡地を確保したころには、藩邸跡のようなまとまった敷地はもはや入手できなかったのかもしれない。中川がそこに創出したキャンパスは実に狭いものであったが、正門は南辺に置かれ、キャンパスは南向きであった。

昭和14年に創出された立命館日満高等工科学校も、南に正門を有していた。中川が脳裏に描いた「空間デザイン」に関して、筆者は史料を見いだせていない。想像の域を出ないが、第三高等学校の景観を見て、そしてその場所に京都帝国大学を創出する業務に、文部官僚としたたずさわった中川には、おそらく南向きに対する思い入れがあったのではないだろうか。本文中では述べなかったが、昭和13年に立命館高等工科学校が開設された北大路のキャンパス（現在の立命館小学校）も南向きであった。

近世末から近代にかけて、京都における都市景観の変化を、大学の立地を中心に叙述してきた。はたして、正門の位置だけで、創立者の「空間デザイン」を推し量れるのであろうか。それよりも前に、学校の敷地確保にかかわる土地所有の変動を議論することがより重要であろう。本報告をもとにして、次の研究段階に進むためには、克服すべき課題が多いようである。

〔注〕

1）山脇正資「大学都市の苦悩と知恵」、植村善博・香川貴志編『京都地図絵巻』、古今書院、2007、pp.18-21.

2）古賀慎二「学問の町 京都」、植村善博・香川貴志編『京都地図絵巻』、古今書院、2007、pp.30-31.

3）河島一仁「大学と旧制高校の立地で考える近代京都の地理―私立4大学と三高・帝大―」、立命館地理学、第17号、

2005、pp.129-139.
4）河島一仁「京都近郊の地理的変化（1889 ～ 1940）―等持院村、マキノ省三、そして中川小十郎―」、立命館文学、第 593 号、2006、pp.92-112.
5）河島一仁「京都における大学の歴史地理―京都御所の周辺地域における変化―」、立命館文学、第 645 号、2016、pp.220-242.
6）河島一仁「京都・衣笠の地理的変化（1868 ～ 1960）―等持院村と立命館―」、立命館文学、第 649 号、2017、pp.15-39.
7）鎌田道隆「倒幕と京都町人」、京都市編『京都の歴史 7 維新の激動』、学芸書林、1974、pp.264-273.
8）岩生成一監修『京都御役所向大概覚書 下巻』清文堂、1973、p.412.
9）岩生成一監修『京都御役所向大概覚書 上巻』清文堂、1973、pp.135-146.
10）町田剛士「禁門の変前後の薩摩藩による京都警衛について―串木野郷士野元良図『上京日記』から―」黎明館調査研究報告第 26 集、2014、鹿児島県歴史資料センター　黎明館、pp.85-103.
11）前掲 7）pp.264-273.
12）「改正 京町御絵図細見大成」、竹原文叢堂梓、慶応四年戌申二月再刻、竹原好兵衛版、木版彩色刷、『慶長 昭和 京都地図集成 1611（慶長 16）年～ 1940（昭和 15）年』、柏書房、1994.
13）日本史籍協会編『尾崎忠征日記 二』東京大学出版会、1932、1970 覆刻、p.151.
14）桐野作人「知られざる京都の小松原調練場」南日本新聞社、2013 年 1 月 27 日、(http://archive.fo/8xily 閲覧日 2017 年 1 月 27 日)。
15）小西四郎「解題」、日本史籍協会編『尾崎忠征日記 二』東京大学出版会、1932、1970 覆刻、pp.481-484.
16）吹田草牧「衣笠　閑静な住宅地衣笠園が活動村に　植民地的気風に侵蝕さる　洛西の名物―福井邸と植木畑」、岩井武俊編『京ところどころ』、金尾文淵堂、1928、pp.202-206.
17）後藤真一「尾張藩京都屋敷とその役職者たち」、岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究 五』清文堂、2012、pp.199-217.
18）「京町絵図」、御用書林村上勘兵衛刊、明治二巳年御改正、木版彩色刷、明治 2（1869）年、出典：『慶長　昭和　京都地図集成　1611（慶長 16）～ 1940（昭和 15）年』、柏書房、1994.
19）京都大学百年史編集委員会『京都大学百年史 総説編』、財団法人 京都大学後援会、1998、p.797.
20）前掲 19）p.799.
21）鈴木栄樹・牧知宏「明治初年における在京藩邸地処分に関する京都府行政文書の概要」、研究代表者・小林啓治「京都府行政文書を中心とした近代行政文書についての史料学的研究」（2005 年～ 2007 年科学研究費基盤研究（B）研究成果報告書）、2008、pp.103-118.
22）後藤真一「京阪地域と尾張藩」、岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』清文堂、2001、pp.309-334.
23）前掲 17）pp.199-217.
24）河野仁昭『キャンパスの年輪―同志社今出川校地―』、同志社大学出版部、1985、p.130.
25）前掲 24）p.38.
26）前掲 24）p.38.
27）前掲 24）p.100.
28）前掲 24）p.43.
29）前掲 24）p.100.
30）前掲 19）p.801-802.
31）前掲 19）p.80.
32）前掲 12）
33）前掲 19）p.802.
34）前掲 19）p.802.

35）前掲 19）p.80.

36）前掲 19）p.802.

37）前掲 19）p.802.

38）前掲 19）p.808.

39）前掲 19）p.803.

40）前掲 19）p.802.

41）前掲 19）p.111、124，125.

42）立命館百年史編纂委員会『立命館百年史 通史一』、学校法人 立命館、1999、p.105.

43）前掲 19）p.810.

44）龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史 通史編 上巻』、龍谷大学、2000、p.627.

45）真宗新辞典編纂会編『真宗新辞典』、法蔵館、1983、pp.224-225.

46）前掲 8）p.19.

47）『復刻版 京都地籍図　第 2 巻』、不二出版、2008、pp.163-164.

48）①立命館百年史編纂委員会編『立命館百年史 通史』、学校法人 立命館、1999、pp.608-611.

②糟谷慶作「父倉橋勇蔵の思い出―『酒徒まんだら』のことなど―」、立命館百年史紀要、第 15 号、2007、pp.141-150.

49）立命館百年史編纂室所蔵.

50）立命館史編纂委員会編集・発行『立命館八十五年史資料集・第二集』1987、p.14.

51）前掲 48）① p.106.

52）前掲 48）① pp.612-613.